

◎ 数教育とその特徴（感覚教具の大切さ）◎

モンテッソーリ教具には、大き々わけて  
感覚教具、数教育の教具、言語教育の教具、コスミック（宇宙）教育の教具などがあると、以前に紹介しましたが、今回は数教育についてお話ししましょう。

『数教育』と聞くと、「幼児に数などまだ早い、難しいのでは？」と思われる方も多いかもしれませんが、

マリア・モンテッソーリは

『人間として生まれてきたものは、みな生まれながらに  
数学的な精神を持っている』とされています。



考えてみると…私たちの生活の中で、例えば一定の時間がくればお腹がすき、眠り、目覚めます。一日の生活自体、数と深い関係を持っています。

整えられた環境の中での子どもの生活において例えば…

1. 自分の使ったものを元に戻すこと
2. シールをきちんと枠の中に貼ること
3. エプロンをきちんとたたむ
4. 折紙を正確にきちんと指導すると子どもは大好きで何度も繰り返す
5. 子どもは、二歳ぐらいから、コップに注がれたジュースの量が多いか少ないかで兄弟げんかをします。



上述のような『秩序に対する敏感期』が、やがて“数”への土台となります。

そしてもう1つ数教育につながる大切なことは、『感覚の敏感期』という時期に感覚教具に触れることにより、次の数の領域（数教育）の準備をしているということです。

それぞれの教具の活動パターンとして、3つあげられます。



- ① 対応づけ（同一性さがし）…（例）雑音筒、布あわせ  
→たくさんある中から同じものを選ぶ頭の動きの練習  
数量と数字を正しく対応させるための準備



- ② 順序づけ（漸次性さがし）…（例）ピンクタワー、赤い棒  
→数の1、2、3…が一定の漸次的な変化を追っていることを知らせる準備

- ③ 分類づけ（類似性さがし）…（例）重量板  
→加減乗除の四則の計算に入る時、位取りをそろえる時などに必要

- ①②を共に含む教具…（例）はめこみ円柱  
※10できているもの→（例）ピンクタワー、茶色の階段  
はめこみ円柱、赤い棒 など

“数”は抽象の世界ですが、子どもは抽象を教具という具体物を通す事によって、実際に目で見て手で触って確かめることにより、驚くべき吸収力で数を楽しく獲得していくのです！！

赤と青の数棒の紹介



「赤い棒」と同寸の10本の棒から成り、  
違いは10cmずつ交互に赤と青の2色に  
塗り分けられている点です。

最短10cmから最長は100cmまで1～10を表すように考案されています。この教具は数を集合体として把握させます。

適応年齢は個人差があり、一概には言えませんが、4歳からです。

紹介方法は、最短より3本ずつ紹介していき、最長の棒までいきます。何回も繰り返して、子どもと交替して持ったりして、数の集合が増えていくことを感じさせます。また、毎回1から数えることによって、1から10までの数詞と、数の序列（順番）を定着させます。